

分裂の歴史

萩原晋太郎

はしがき

さきに「労働と解放」紙に「歴史にみる分裂の要因」の短文をのせたが、さらにくわしく書きとめておきたいと思いたった。

労働者の大同団結は叫ばれること久しく、ならざることもまた久しい。労働者は賽の河原のように、ようやく団結をきずきあげてはすぐまた崩れるという、にがい歴史をくりかえしてきた。

分裂させるものは何か。各時代において分裂のあらわれかたがことなっている。

そこでここに、分裂や衰退の現象を浄玻璃の鏡にあてて、失敗をかさねることがないよう、その本質を見きわめようとするも

のである。

I 日清戦争以前

1 問題点

明治初年から鉱山や紡績工場での闘争の記録がある。だがそれらは一揆的なもので、ストライキのための団結も闘争の終了とともに消滅している。

組織的な労働運動がおこったのは、日清戦争以後のことであり、政府が争議統計をつくりはじめたのも一八九七年以降である。一八九七年以前の騒擾や争議は、記録されるものでは六一件ある。⁽¹⁾

明治初期の労働運動の消長をみて、組織

の失敗の主因はつぎの三点にあったといえる。

- ① 皇国思想による圧迫
- ② 労働者の意識の低さ
- ③ 財政問題のトラブル

以下にこの具体例を示そう。

(一) 渡辺徹「明治前期の労働争議―三〇年以前の争議事例の紹介」京大人文科学研究所創立三五周年記念論文集

2 労働者の無理解

2・1

日本資本主義は、もっぱら富国強兵政策によって発展した。先進資本主義国に追いつくために、世界市場に進出し、同時に外貨を獲得して軍需品の輸入を確保するため、労働者は手つとり早いコストダウンの

手段として、極端な低賃金・労働強化をしいられた。

それとともに皇国思想が労働者の組織運動を罪悪視し、きわめて困難にしていた。政府の圧迫や資本家の妨害をさけ、大衆を獲得する方便として労資協調的な迷彩をほどこしても、なおかつ、それは困難であった。⁽¹⁾

つぎにその代表的な例を示そう。

2・2

一八八四年、池田竹次郎らは東京の秀英舎で活版工組合の組織をはかり、相談会をひらいた。だが労働者は運動におそれを感じ、また池田が私腹をこやすためにするのだと誤解するものもあり、池田は運動をすすめることができなかった。

五年後に跡部らが秀英舎の労働者を説いて、ようやく組合を作るまでになった。だが今度は他社の印刷工が党を組んで反対し、暴力沙汰におよび、この運動もまた挫折してしまったのである。

2・3

一八八七年二月二十四日、小沢弁蔵・国太郎の兄弟が主になって鉄工懇親会を作った。

だが会をはじめに乱れ、組合結成の下相談どころか会衆はバクチをやり、散会后洲崎遊廓にくりこんで数日もいつづけする者が続出する有様であった。小沢らは再出発をはかったが、労働者の妻たちの反対にあつて、ついにこれも流産してしまった。⁽²⁾

だがこうした情勢の中で、徳富蘇峰が『国民の友』（一八八七年二月発刊）で、先進国の労働運動や社会主義を紹介し、労働組合の結成をよびかけたことは意義ふかいものである。

(一) 赤松克麿「日本社会運動史」岩波書店

3 財政問題のトラブル

一八八九年六月二日、小沢弁蔵、相田吉五郎らは、石川島造船所五名、陸軍造兵廠の柳沢清次郎ほか四名、海軍造兵廠の千代松只蔵ほか二名、田中機械製造所の天野友一ほか二五名、鉄道局の本多庫源太ほか三名、職工学校の大久保忠正、山岡定吉らと「鉄工同盟進工組」を結成した。⁽¹⁾

翌年、本多信興、深沢雅直、吉田鎌三らが「活版印刷工同志会」を結成した。⁽²⁾第一回総会では一五〇名の会衆が参加した。

II 明治後期

1 問題点

一八九四年の日清戦争は、日本資本主義を急激に発展させた。産業資本の確立とともに戦中戦後の労働者の窮乏は労資対立を表面化し、労働者は自衛のために自然発生的にたちあがった。

明治後期のおもな問題点はつぎの二点である。

- ① 労組本来の任務をもたぬ協調的組合は、会員の増加に比例して財政のひっ迫から衰退した。
- ② 資本や国家が、労働者を対抗勢力として意識したことから弾圧がつよまった。

2 財政の破たん

一八九七年七月五日、高野房太郎、片山潜、村松民太郎、山田菊三、沢田半之助、城常太郎ら七一名が東京で「労働組合期成会」を結成した。

会員は同年末二二〇〇名、九八年末三〇〇〇名、九九年五七〇〇名と増加した。

また九七年一月一日、砲兵工廠、新橋鉄道局工場、甲武鉄道、日本鉄道大宮工場ほか車輛工場や汽罐工場の鉄工一八〇名が「鉄工組合」を結成した。

組合員は九八年末三二支部二七一七名、一九〇〇年末四二支部五四〇〇名に達した。

しかし組合員の増加に比例して、財政は窮乏していった。後者は会費納入者が一〇〇〇名程度にとどまる有様であった。

これは組合員の共済事業を重点にしていたので、それにひかれて加入するものが多く、共済活動そのものが組合の大きな財政負担となったのである。

高野らが共済規約を制定するさいに参考にしたA・F・L（アメリカ労働総同盟）の数字よりも、低賃金にあえぐ日本人労働者

の疾病・死亡率がはるかに高かった。救済金支出の赤字は、救済金の削減や経費の切りつめではもはや解消できなかったのである。⁽¹⁾

以上をおもな面とすると、側面の要因として片山・西川はつぎのように記している。⁽²⁾

①工場法が制定されぬことへの失望

②労働運動の真理を理解せず、ただ景気につられて加入した者が続々と脱会したことに

③おもな運動者が生活に追われて運動に専心できなかったこと

(1) 片山潜「自伝」

(2) 片山潜・西川光二郎「日本の労働運動」一九〇一年

3 弾圧と抵抗

かたい団結と組織的闘争によって勝利を収めた例は多い。しかしここでは敗退したいくつかの闘いをふりかえって、教訓をくみとりたい。

3・1 天満紡績

一八九四年一月二六日、大阪の天満紡績で労働者が幹部の解雇を要求してストをおこした。鈴木純一郎はこれを日本の工場ス

ト第一号としているが、明らかに誤りである。⁽¹⁾

さて天満紡績ではスト破りの仲間が出て、これをなぐる事件があり、警官が出勤した。首謀者数名が工場妨害罪で重禁錮と罰金刑を課せられ、ストは労働者の敗北に終わった。

3・2 三重紡績

一八九六年夏、三重紡績でストがおきた。

第一回は本社工場ミュール付属の男工二三名が、部長に不満をいだいて休業した。

おもだつものが平素の貯金をはたいて、新参職工をたすけ勢力をたもった。だが罷業者は工場の一部にすぎなかったため、他部の男工が動員されて、機械の運転をとめることができず、ストは失敗した。

第二回はこの二日後、ボーラー部注油男工二一・一三名が、賃金不足を訴えてストに入った。だがこれも少数のため会社に対抗することができず、ふたたび就業することを会社にしたのむ有様となった。

第三回は精紡部男女工の大半が、監督者に対する不満からストをおこした。だが首謀者五名が臧首され、会社の説得にあつて

ストは一夜でおわってしまった。⁽²⁾

3・3 日本鉄道

一八九八年二月、戦争中からかなり不満のたまっていた日本鉄道会社の機関手・火夫は「我党待遇期成大同盟」を結成して、ストをおこした。会社側はさかんに組合破壊工作をおこなったが、ストは労働者の勝利におわった。四月五日、労働者は「日鉄矯正会」を結成した。⁽³⁾

一九〇〇年三月、治安警察法が出ると会社側はこれを利用して矯正会を破壊しようと工作したが、果せなかった。⁽⁴⁾

そこで一九〇一年一〇月、会社側は東北地方の陸軍大演習を機に、矯正会が天皇の列車に事故をおこさせようとしたとデマをとばし、福島警察と一しよになつてついに矯正会を強引に解散させたのである。⁽⁵⁾

3・4 活版工組合

日鉄ストの翌月一八九八年三月、深川印刷会社の職工七名が発起人となって、深川区と本所区の印刷工百余名が「活版工同志懇話会」を結成した。

会社側はただちに発起人の七名を臧首し、ストがおこった。活版工や一般労働者の支援にもかかわらず、ストは敗北におわ

った。七名はブラックリストに付され、飢えにさらされて心ならずも転業したり、地方に去ったりした。⁽⁶⁾

この懇話会は一八九九年一月、島田三郎を会長とし、各界の名士を名誉会員にして、二千余名の「活版工組合」に発展した。だが労組としての自主性のない極端な労資協調主義を通したので、半年ほどつぶれた。

そして芝の印刷工が、岡千代彦を中心に「誠友会」を結成した。これはそれまでのように名士や学者をかつぐことをやめ、自主的な団結と行動を自覚したもので、特筆すべきことである。⁽⁷⁾

3・5 大阪砲兵工廠

一九〇六年、戦後軍工廠の仕事が閑になり労働者は収入が減って物価騰貴にたえられなかった。そこで一月に青森県大湊の海軍修理工場、八月に東京小石川の陸軍砲兵工廠や呉海軍工廠などで賃上ストをおこした。その結果それらの工廠は賃上げをかせがえたが、大阪砲兵工廠だけはおきすてられた。

二月二日、火砲工八百余名が「増俸請願書」を出し、聞き入れられなければ大同盟

罷工をしよう」と決議した。この密議が工場長らに知れ、首謀者一〇名が臧首された。ついに一六〇〇〇名全職工が同盟隊にくわり、一日深夜、代表八〇〇余名が玉造稲荷で悲壮な連判式をおこなった。だが請願書提出の一日四朝、憲兵隊と七五〇名の警官隊が動員され、工廠内で四〇名が検束された。こうした弾圧で、ストは敗北におわった。⁽⁸⁾

(1) (2) 鈴木「我国における同盟罷工の先例」『国家学会雑誌』一八九六年一〇月号

(3) 「労働運動の復興期」『直言』第二巻第一〇号

(4) 「治安警察法と日鉄」『労働世界』第六〇号一九〇〇年五月一日

(5) 木下尚江の記事『毎日新聞』一九〇一年一月三〇日

(6) 「黒律法ブラックリスト」『労働世界』第一号一九〇八年五月一日

(7) 岸上克己「活版工の過去および現在」『大阪砲兵工廠の同盟罷工』『光』第一巻第三十一号、一九〇六年二月二五日

4 社会主義運動との関連

4・1

一九〇〇年三月の治安警察法について、一九〇一年五月、幸徳秋水、片山潜、木下尚江、安部磯雄、西川光二郎、河上清らの

の「同盟罷業調」は次の通りである。

結果	回数(%)	参加人員
全部または一部 目的達成	一二五(五三・四)	二一四三一
条件つきまたは 期限つきで目的 達成	一九(八・二)	六四九八
目的を達しなかつたもの	七〇(二九・九)	一一五四一
結果不明	二〇(八・六)	二一五五
合計	二三四	四一六二五

この年の注目すべき事例をとりあげよう。

まず三大争議とよばれるのが、足尾銅山(二月)、三菱長崎造船所(二月)、別子銅山(六月)の闘争である。足尾と別子は軍隊の大弾圧によって、ストは敗れた。だが足尾で永岡鶴蔵、南助松、山本利市、井守信吾、加藤栄松、林小太郎らの組織した「大日本労働至誠会」が活発な活動をつづけたことは、多くの労働者に共感と勇気をよびおこした。

三菱長崎ではやはり警察や憲兵のあくなき干渉圧迫があったが、労働者のかたい組織的抵抗によってついに勝つことができた。

四月には峰岸正次郎、吉川常二郎、野本

農商務省による争議統計は次の通りである。

年次	争議件数	参加人員
一八九七 明治三〇後半	三二	三五一七
一八九八	四三	六二九三
一八九九	一五	四二八四
一九〇〇	一一	二二一六
一九〇一	一八	一九四八
一九〇二	八	一八四九
一九〇三	九	一三五九
一九〇四	六	八七九
一九〇五	一	五〇一三
一九〇六	一三	二〇三七
一九〇七	五七	九八五五
一九〇八	一三	八二二
一九〇九	一一	三二一〇
一九一〇	一〇	二九三七
一九一一	二二	二二〇〇
一九一二	四九	五七三六

なお西川光二郎によれば、一八九七年前半期のストを一四件あげている。⁽¹⁾

右の官庁統計では、一九〇七年のストは明治年間最高を示している。だが、「日刊平民新聞」、「大阪平民新聞」、「日本平民新聞」、「社会新聞」の報じたストは、重複するものを除き、一四九件に達している。実際にはさらにこの数字を上まわっていたであろう。

また一八九七年七月から一九〇七年まで

「社会民主党」の結社が禁止された。こうして労働運動も非合法なものにされ、多くのストが軍隊や警察によって弾圧蹂躪された。

この中で、徹底的に労働組合の組織の必要と意義とその擁護を強調しつづけたものは西川と片山であった。治安警察法は労働運動と社会主義を直結させる作用をなした。

日露戦争の危機が迫るや、幸徳・堺利彦・西川光二郎・石川三四郎らのおこした「平民社」は敢然と非戦論を高唱し、弾圧の嵐の中で闘いつづけた。

日露戦争後渡米した幸徳は、議会主義をすてて革命的サンジカリストに脱皮した。

幸徳と大杉栄は議会政策にたよることの愚を訴え、労働者を解放する道は労働者自身の団結と行動しかありえないことを叫んだ。これは以後の労働運動に大きな影響をあたえることになった。

こうして当初共同戦線をはっていた左翼陣営は、合法議会主義をとる右派とアナルコサンジカリズムに至る左派とに対峙しやすむようになった。

4・2 ストの高潮

正吉、水沼辰夫らが、欧文植字工組合「欧友会」を結成した。東京の欧文工のほとんど全員が加入し、横浜・神戸・長崎などにわたり、三五〇名の会員ができた。これは幾多の苦闘にたえて、大正・昭和戦前を縦につらぬき、アナ系組合の牙城になったのである。

一〇月には大阪で「活版工組合」が結成され、二〇余か所の工場で六〇〇〜七〇〇名による賃上ストをおこした。裏切者が出たことと、警察の干渉とでストは鎮圧された。だがこの横断組合のストが資本にあたえた影響は大きく、一五〜三〇%の賃上げをかせいだのであった。

しかし、この年のストの高潮を、労働者階級の革命化だとみることはできない。社会主義者の活動によって、たしかに労働者意識の自覚はあるが、それは限定される範囲であった。その証拠に、翌一九〇八年には急激にストが減退し、劇的なストをおこした足尾銅山や佐渡鉱山では、ストの先頭にたつて闘い犠牲者となった同志やその家族をも見殺しにするような意識の低調化さえみられるのである。⁽²⁾

やがて政府は、いっさいの社会主義運動

を根たやしにしようとして、かの大逆事件をでっちあげた。ここに、ひ弱で底の浅い労働運動は一挙に暗い冬の谷間に蹴落されたのである。

日本人民はつねに時の権力に対して卑屈にならされていた。これが昭和の今日までつづく大きな問題点といえよう。

(1) 西川「明治年間の同盟罷工」(「社会新聞」第一号一九〇七年八月一日)

(2) 永岡鶴蔵「足尾銅山の迫害」(「社会新聞」第四三三号一九〇八年四月二六日)「あわれなる一家」産業界の悲劇(「社会新聞」第五三三号一九〇九年三月一五日)

III 関東大震災ころまで

1 問題点

1・1 大正前半

大逆事件後の暗い冬の中から、大杉栄を中心とするアナキストがたちあがった。

同時に大逆事件の副産物として、友愛会(総同盟)が生れた。大正前半の労働運動の代表的かつ対照的なものとして、この友愛会とアナ系の印刷工組合があげられる。

日本の労働運動は、太平洋戦争前は帝国政府に保護されるものが安全に成長し、戦

後は占領軍に公認されるもののみ発展したのである。

1・2 関東大震災まで

第一次大戦を機に資本の集中と独占がすすみ、重工業がおこり、工場数と労働者数は飛躍的にふえた。

だが戦争景気反比例して労働者の生活は窮乏し、ことに一九二〇年以後の戦後恐慌ではげしい資本攻勢にさらされた。

支配階級は、つぎのような手段で労働者をたたきのめした。

- ① 警官隊による弾圧。ことに治安警察法の発動がいちじるしい。
- ② 軍隊による弾圧。
- ③ 警察の圧力による争議調停介入。
- ④ 各種の御用団体、黄色組合、右翼団体による暴力。
- ⑤ スパイ政策、御用組合政策。
- ⑥ ブラックリストによる活動家・誠意者の就職防止。
- ⑦ ロックアウト。

合法的な闘争など認められず、死にもの狂いでたちあがった労働者が、サンジカリズムを唯一最大の活路として求めたことは当然である。

ことに一九二一年の神戸川崎造船所と三菱造船所の大争議は代表的なものであるが、同年のおもなストをみると、

- 一月 兵庫県橋本造船所、東京足立製作所、日本鉄工会社、夕張炭山。
- 三月 尼ヶ崎東亜セメント会社、東洋鍾伸銅会社、汽車製造会社、東京巢鴨ナポール時計工場、園池製作所。
- 四月 大阪電灯会社、足尾銅山。
- 五月 田中機械製作所、川崎鉄工所。
- 六月 藤永田造船所、住友伸銅所、住友鋳鋼所、住友電線製造所、内田造船所、横浜船渠会社。
- 七月 神戸川崎・三菱両造船所、神戸製鋼所、台湾製糖会社、ダンロップ会社、夕張炭山。
- 九月 横浜製作所、神馬鉄工所、浅野造船所。
- 一〇月 浦賀船渠会社、石川島造船所。
- 翌二二年二月 小野造船所、横浜船渠。
- 五月 大阪鉄工所。

これらのストはいずれも争議団と経営側の御用団体や警官隊と流血の乱闘がくりかえされ、争議団による工場占拠、生産施設の破壊、経営首脳への襲撃などが実行された。

これは大正後期をいづるストの特長である。

労働運動へのアナキズムの浸透はめざましいものがあつた。労資協調をモットーとする総同盟のために戦闘化し、総同盟のダラ幹は防戦に躍起となつた。総同盟はのちに共産主義の侵入によつて分裂し、ますます右傾していった。

大正時代の労働運動はAB抗争・アナボル論争といわれるが、自由連合組織による直接行動を主張するアナキストと、中央集権支配による政治運動を主張するボルシェビキとの対立がはげしかった。

明治時代の分裂とあきらかにことなる点は、そこに思想がふかく入りこんでいたことである。

年	争議件数	参加人員	争議結果
一三	四七	五二四二	一
一四	五〇	七九〇四	二
一五	六四	七八五二	二
一六	一〇八	八四一三	三
一七	三三	五七三〇	一
一八	一七	六四七二	一
一九	七六	六四七二	一
二〇	六三	一三七七	一
二一	二八	三六三四	一
二二	二五	五八二五	一
二三	二五	四一五〇	一
二四	三三	五五二六	一
二五	三三	五五二六	一
二六	三三	五五二六	一
二七	三三	五五二六	一
二八	三三	五五二六	一
二九	三三	五五二六	一
三〇	三三	五五二六	一
三一	三三	五五二六	一
三二	三三	五五二六	一
三三	三三	五五二六	一
三四	三三	五五二六	一
三五	三三	五五二六	一
三六	三三	五五二六	一
三七	三三	五五二六	一
三八	三三	五五二六	一
三九	三三	五五二六	一
四〇	三三	五五二六	一
四一	三三	五五二六	一
四二	三三	五五二六	一
四三	三三	五五二六	一
四四	三三	五五二六	一
四五	三三	五五二六	一
四六	三三	五五二六	一
四七	三三	五五二六	一
四八	三三	五五二六	一
四九	三三	五五二六	一
五〇	三三	五五二六	一

(1) 社会局「労働統計要覧」(「労働時報」)

2 印刷工組合の消長

2・1 活版工組合信友会

一九一五年、横浜でのドイツ系欧文紙が

発禁や廃刊になり、また在留外人の帰国や商店閉鎖などから、欧友会は二〇%近い会員の失業者が出た。一〇月の第九回大会で機関紙の発行停止を決議し、会務も中止状態となった。

翌一六年一〇月三十一日、水沼辰夫らは復興をはかり、五〇名の同志をあつめ「信友会創立協議会」を結成した。一七年四月十五日、「活版工組合信友会」を結成した。これには欧文植字工をはじめ、和文工、機械工、校正係、製本工など印刷業の全従業員組合組織となり、四〇〇名の入会者があつた。

一八年一月には一〇〇〇名に達した。三月から機関紙「信友」を発行して、アナキズムの旗色をあきらかにした。しかし七月の米騒動を機に、関係のない一〇〇余名の会員の拘引や留置が頻々とおこなわれた。多くの会員は恐怖と誤解にとらわれ、脱会者があいつぐようになつた。そしてついにもとの欧文工だけがふみとどまる状態になつた。

一九年五月一日、水沼らは信友会の再建につとめ、実に一、五〇〇名の会員を組織した。アナキズムの浸透は大きく、運動の

活発さは労働運動の先端を切っていた。

2・2 新聞印刷工組合正進会

一九一九年五月、東京市内一六社の新聞印刷工を糾合して、「革進会」が結成された。

七月二四日、革進会は八時間労働制と最低賃金を要求してゼネストに入つた。七月三十一日から五日間、市内に一枚の新聞も見ず、首都二〇〇万人の耳目を完全にふさいだ。だが会長の横山勝太郎は、労働運動の何たるかも解さぬお飾り会長であつた。臨時大会にスト支援の決議を伝達にきた信友会の入場を拒絶し、友愛会の援助もことわり、革進会は孤立無援となつた。そして横山は新聞社と警視庁からおどされ懐柔されて、軟化した。

一部の罷工者たちが横山の除名を決議し、自主的な行動をすすめるようとはかつたが、時すでにおそかつた。治安維持を理由に弾圧され、同志は同盟解雇されて、ついに革進会は崩れ去つた。

各社の有志は再建をはかり、一二月九日、布留川桂・信兄弟、綿引邦農夫ら一六名を発起人として、「新聞印刷工組合正進会」を結成した。

二〇年九月、正進会は争議惨敗一周年を期して、ふたたび八時間労働制、最低賃金制ほかの要求をにかけて闘争にたちあがつた。

新聞社側は結束して要求をふみにじり、報知三八名、朝日二四名、日日一二名、読売一二名、毎日二名を識首した。警察は三〇余名を検束し、正進会のおもなメンバーには尾行をつけて監視するなど、弾圧と切り崩しをつづけた。

こうしてようやく一〇月一日、万朝報の八時間二部制の即時実行と時事新報の翌年一月実施の予約をえただけで、ストは中止のやむなきにいたつた。

二三年五月、信友会と正進会は合同して「東京印刷工組合」を結成した。

(1) 近藤憲二「日本アナキズム運動史」

「クロハタ」一九五八(一九五九年)

河本乾次「日本の自由連合主義労働運動」(「無政府研究」一九六〇年)

3 ABの対立

3・1 友愛会のなりたち

一九一二年八月一日、鈴木文治らは「友愛会」を結成して、徹底した労資協調主義をとつたため、政府や資本家に保護されて

順調に進展した。

荒畑寒村は当時、友愛会をつぎのように評している。¹⁾

「友愛会の評議員も多くは学者、社会改良家、資本家であり、その運動方針は爭議にさいして労資間の調停を勧告するものであった。」官憲は「労働階級の、勢力のいまだ強固に組織されていず、したがってその意識自覚の程度、またなおいまだ薄弱なるをまぬがれなかった状態は、ただひとたび海外に出ればたちまち革命的となり、社会主義的となる鈴木氏をして、日本に帰ればたちまち労働の協調をとえ、争議の仲裁に奔走させた。」

鈴木はアメリカにおこった排日問題緩和のために、洪沢や添田にすめられて渡米し、労働大会で勇ましい演説をおこったが、

「国内では労資協調、海外では階級闘争、これが当時の鈴木氏の態度であった。彼はさきにその国際主義的言辞の借着によって、排日運動緩和という洪沢男らの依頼を完うせんとしたのである。」²⁾

3・2 労働組合同盟会

一九二〇年三月一五日、水沼辰夫、服部

浜次らが主唱し、堺利彦が保管していた幸徳の『基督抹殺論』の印税を運動費として、「メーデー協議会」が生れた。

そして五月二日、日本ではじめてメーデーが敢行されたのである。

五月八日、「メーデー会計報告会」が友愛会本部をかりてひらかれた。この席上、メーデーの成功にはげまされ、今後永続的に各組合の連絡機関を作ろうと提唱され、「労働組合同盟会」の結成が決議された。五月一六日、会は「全国のおよび地方的各種労働者および産業ならびに職業組合」の連盟として、正式に発足した。

参加組合はつぎのとおりである。

信友会、正進会、啓明会、大進会、汎労働会、工人会、工友会、友愛会、交通労働組合、日本機械技工組合、紡績労働組合。

さて同盟会内では左右の意見がしばしば対立した。たとえば尼港事件に対して、友愛会、汎労働会、工人会は軍部の圧迫をおそれて世論に同調することを主張したが、信友会、正進会、啓明会はシベリヤ出兵に反対して軍国主義打倒のために闘うことを主張した。同盟会としての歩調がそろわず、信友会、正進会らは独自の立場で反戦運動

を展開した。

また、協調会や東京市社会局からの晩餐会招待に対して、友愛会は「協調会にはせっかくの招待だから顔だけ出してよい」「市当局とは折衝の要もあるから応じたほうがよい」と主張した。信友会、正進会らは「招待に応ずるのは資本家との妥協をみとめたことになる。すべてこの種の招待に応ずべきではない」とつよく反対し、同盟会は招待をことわるようになった。

二年一月、友愛会主事の棚橋小虎は、機関紙「労働」に「労働組合に帰れ」を発表した。これは友愛会内部にサンジカリズムの滔々たる流れができたことをおそれ、たまりかねてその防波堤をきずこうとしたものである。これに対して同盟会内から「知識階級指導者排斥」運動がおこった。

同年五月一日、第二回メーデーが東京、足尾、横浜、大阪、神戸などでさかんにおこなわれた。東京では芝浦埋立地に一八団体一〇〇〇余の労働者があつまった。官憲の圧迫は前年よりもひどく、各所で衝突して多くの検束者と起訴者を出した。さらに会場では友愛会と信友会、正進会が衝突して乱闘さきぎになった。

六月四日、同盟会代議員会で友愛会本部、東京鉄工組合、紡績労働組合、東京電気組合、機械鉄工組合を代表して松岡駒吉が、同盟会の脱退を発表した。この脱退は麻生久、棚橋らの策動によるものであった。これが友愛会が労働戦線を破壊した行動の第一号である。

3・3 総同盟系と反総同盟系に二分

二年六月四日、アナ系の機械技工組合、純労働者組合、日本労技会、本芝労働組合をはじめ海軍工人会、陸軍現業員組合などが、「機械労働組合連合会」を結成した。

七月七日、東京鉄工組合が友愛会東京連合会を脱退した。これを機に、おもなアナ系組合はつきつきに友愛会を脱退した。

八月、小石川労働会のアナキスト、工友会、芝浦技友会、日本労働組合が合同して「日本労働連盟」を結成した。

この年、神戸の三菱・川崎両造船所の大ストをはじめとして、全国的にストの大旋風がまきおこった。そのほとんどが連けいし、かつサンジカリズムによる直接行動や生産管理闘争をくりひろげた。

参加人員三五〇〇〇、罷業日数四五日に

及ぶ神戸の大争議はアナキストも積極的に関わったが、軍隊と警官隊の大弾圧をうけ、労働運動の活動家一一〇六名が逮捕されて惨敗した。

なおのちに政府は、ダラ幹の温存策をつぎのように告白している。³⁾

「賀川を起訴すべきや否や問題になった。外形の事実をみると賀川豊彦が指導者になって川崎造船所におしかけて官憲と衝突したということになるから、騒擾の張本人とみえるが、だんだんしらべてみると賀川にはその意思なかりしことがわかり、不起訴したのであります。その当時ある方面より苦情があつたが、のちになって賀川の不起訴がよろしかったということをみな認めたようであります。」⁴⁾

3・4 全国労働組合総連合

一九二二年五月七日、月島労働会館でのメーデー報告会の席上、啓明会の下中弥三郎が「全国労働組合総連合の計画をすすめること」を提唱し、満場一致で可決した。

五月一二日、月島で第一回協議会をひらいた。組合同盟から七組合、総同盟から本部と五組合、その他単独組合、計五三名が出席した。下中を座長に審議し、「総連合

相談会」の名で全国の各組合に案内状を出した。

九月一〇日、神戸で総連合創立準備委員会をひらいた。関東、中部、関西から二八組合、百十数名と傍聴者三〇余名が参加。名古屋、京都、大阪、神戸、朝鮮、千葉からの委任は二七組合であった。

しかし、「種々の異質の組合で組織するのだから、当分は東京の組合同盟会のような組織でゆくことにしよう」というはじめの申しあわせを破って、総同盟は強力な中央集権組織のもとに指導権をにぎろうとした。この総同盟の態度は中間的労組をもいたく刺激し、反総同盟的感情を高める結果となった。信友会、正進会はパンフレットをくばって、自由連合組織についての理解と協力を訴えた。

つぎに準備会では、理事の選出規定をめぐって意見が対立した。

組合同盟側は加盟組合から各一名の理事制を、総同盟は一定選挙区を作つて少数の理事制を、主張した。後者は中央集権の立場から理事会につよい権限をもつ少数がつこうがよい。前者は自由連合の立場から、個々の組合の自主性を重んじ、かつ理事の

専制を防ぐのに多数をよとした。少数制だと、理事を出せない組合は大会からつぎの大会まで発言の機会がない。そうした組織にすることは、各組合が一単位になって連合するという総連合の根本精神に反する。理事を出せない組合にとっては連合ではなくて隷属になる、として各組合一名の理事を強調したのである。

この論争はまともらずに、そのまま大会にもちこすことになった。

こうして九月三〇日、大阪天王寺公会堂で「全国労働組合総連合結成大会」がひらかれた。参加団体五九、代議員一〇六名。傍聴席には労働運動、社会運動の精鋭をすくべて、一堂に相会した。

この日の総同盟の態度ははじめから挑戦的で混乱をつづけ、ようやく午後二時に開会する有様であった。紛議を予期した理事制の問題に入る前に、規約第二条但書の組織方法で早くも意見の衝突となった。二時間の休憩後、午後八時に再会したが総同盟側の投石を機に、ついに官憲の中止解散命令をうけた。

組合同盟側はすぐさま議長をつうじて、「会議の続行をはかる方法を講じること。」

それが不可能なら、適当な結末をつけるための協議会をもつこと」を提議した。

しかし議長は何らの処置もとらず、総同盟派は翌日独断で「決裂」を宣言した。こうして総連合は支配権力と、総同盟の背信によって不成立におわたったのである。

総同盟の決裂宣言は最後に、「われらはかくのごとき思想の排撃を期する。……この誤まれる思想を労働運動の圏外に駆逐すべく、積極的に努力することを宣言する」と挑戦した。これに対して自由連合派も宣言を発したが、その最後はこう結んでいく。

「しかしながら、われわれの正面の敵は資本家である。いかに職業的運動者が自己の立場を維持する必要上われわれを敵視しようとも、もしふつうの問題で同一歩調をとる必要を感じた場合には、将来の希望などを条件とせず、一致の行動をとるだけの雅量のあることを声明する。」

3・5 総同盟の腐敗

一九二三年、東京錦糸堀の汽車会社で、「関東車輻組合」が機械労働組合はじめ自由連合派各組合の応援のもとにストをおこした。

これに対して総同盟は南葛労働組合とともに、御用組合「親睦会」をたすけてスト破りをおこなった。憤激した自由連合派各組合とアナキスト団体の有志約五〇名が、スト破りの本拠、総同盟関東東鉄工組合本部支部をおそった。

この動きは関西にも波及し、各所で「労働者階級の裏切者総同盟を撲滅せよ」と叫んで、演説会の打ちこわしや乱闘がおこった。

総同盟はまた、京都の奥村電機のスドでも「国粋会」とていけいした。三条青年会館でのアナキズム演説会では、総同盟が襲撃して負傷者が出た。つづく大阪堺公会堂での「総同盟撲滅演説会」には、西尾末広を指揮者として総同盟が大挙してのりこみ演説を妨害した。

二四年、総同盟は大会で、普遍利用の方向転換を宣言した。

二五年に入り、左右の紛争がふかまり、五月二四日、中央委員会は共産党系二三組合の除名処分をおこなって分裂した。除名された革新同盟加盟組合は同月、神戸で全国大会をひらき「日本労働組合評議会」を結成した。

分裂前の総同盟の思想対立状況を、山本懸蔵は次のように組合数で示している。⁽⁶⁾

地方	左翼	右翼	中間
関東	六	一	一
中部	四	〇	〇
京都	二	〇	〇
大阪	四	〇	〇
泉州	〇	〇	〇
神戸	六	三	六
九州	〇	〇	〇
その他	〇	〇	〇
合計	二六	二四	九

1 問題点

大正期の労働運動はアナルコサンジカリズムに焦点があわされ、合法議会主義の影は薄かった。一時はもありあがつた普選熱が冷めたころ、政府は治安維持法とだきあわせの普選をあたえた。左手に鉛、右手に鞭は、古今洋の東西を問わず、すべての政府資本家の常套手段である。

関東大震災による労働者の打撃は大きかったが、その混乱に乗じた甘粕事件や魚戸事件なども労働者を萎縮させた。

イギリスにマクドナルド労働党内閣ができ、日本に普選案が通過するとともに、無産政党組織の気運が高まった。普遍利用に転向する労組がふえた。労働ボスは露骨に労働者組織を政党への投票箱、賽銭箱に利用しはじめた。

このような中で、アナキストは全国的にアナ系労組を結集し、戦線の整備につとめた。だが、政府資本家と闘い、議会主義者と争いながら、同時に自称純正アナキストとアナルコサンジカリストが相対するなやみをかかえていた。体勢の弱点がアナキズム運動の進展をばんだ。さらにテロリズム

ムと略取主義を曲解してうけついだ一部の行動が、アナキズムを民衆に誤解させ、浮きあがらせてしまうもとなしたのである。分裂した自協、自連がふかく反省し合同をはかったが、時すでに遅かった。

大右翼の日労会議が結成され、軍部や右翼団体のテロが横行し、メーデーは禁止され、軍工廠の労組は解散させられて、三七年、日華事変に突入した。総同盟はスト絶滅を宣言し、官民協力による生産増強をちかった。多くの労組はいっさいで転向し、また旗を巻いた。そして軍部、官僚、軍需産業資本家と、これに追隨する労組だら幹によって、ナチスの労働戦線をまねた産業報国会が四〇年に結成された。

特高警察と憲兵に守られた翼賛政治体制の強行で、労働運動は完全に息の根をとめられて、ついに太平洋戦争がはじまったのである。

外地では朝鮮人アナキストのゲリラ活動がつづけられたが、世界の歴史にかがやく非戦論の伝説は、もはや再現をみることはできなかった。天皇制絶対権力に対して、反逆を全うしえなかったわれわれ自身の奴隷根性を痛切に反省させられるのである。

IV 太平洋戦争まで

- (1) 荒畑「労働運動の復興期」『社会科学』第四巻第一号改造社版一九二八年二月
- (2) 近藤憲二「日本アナキズム運動史」山本乾次「日本の自由連合主義労働運動」
- (3) 一九二八年九月、司法省刑事局思想係検事会同における小山検事総長の講演筆記 近代日本史料研究会刊
- (4) 水沼辰夫「総連合の決裂とその前後」(前掲書(一)に同じ)
- (5) 近藤、前掲(2)に同じ
- (6) 山本「日本労働運動発達過程における第一回総同盟分裂まで」(前掲書(一)に同じ)